

栄誉

竹内 理 ウイルス研究所教授が日本学士院学術奨励賞を受賞

このたび、竹内 理 ウイルス研究所教授が日本学士院学術奨励賞を受賞され、授賞式が2月24日(水)に日本学士院で行われた。同賞は日本学術振興会賞受賞者の中から、毎年6名以内に授与するものである。以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。

竹内 理 教授は、平成7年3月大阪大学医学部を卒業、同年大阪大学医学部附属病院臨床研修医、同8年大阪府立病院研修医、同12年日本学術振興会特別研究員-DC採用、同13年大阪大学大学院医学系研究科博士課程を修了し、同年医学博士の学位を授与された。同14年ハーバード大学博士研究員、同16年大阪大学微生物病研究所助手、同19年に同准教授、同24年に京都大学ウイルス研究所教授となり、現在に至っている。

同教授の受賞研究テーマは「自然免疫における炎症調節分子機構の解明」である。

自然免疫は感染防御に重要なシステムである。同教授は、異なる病原体認識受容体が異なる病原体の分子パターンを認識することを発見し、自然免疫に



おけるパターン認識とその多様性という概念の誕生に寄与した。さらに同教授は、自然免疫調節機構を研究し、mRNA分解による自然免疫応答制御とそれに関与する新規酵素を発見しRegnase-1と名付けた。加えてRegnase-1とRoquinが時空間的に異なるmRNA分解メカニズムにて協調することで抗病原体免疫応答を調節するという新しい免疫応答制御機構を発見している。

同教授の研究成果は、病原体に対する感染防御機構解明に向けた重要な基盤を提供するものとして独創性と新規性が国際的に極めて高く評価されているばかりでなく、自然免疫システムが多くの炎症性疾患に関与することから、新しい炎症調節機構として世界から広く注目されており、竹内教授の今後の益々の発展が期待される。

(ウイルス研究所)

植村卓史 工学研究科准教授が日本学術振興会賞を受賞

このたび、植村卓史 工学研究科准教授が日本学術振興会賞を受賞され、授賞式が2月24日(水)に日本学士院で行われた。以下に、氏の略歴、業績等を紹介する。

植村卓史 准教授は、平成9年3月京都大学工学部を卒業、同14年3月同大学院工学研究科博士後期課程修了、日本学術振興会特別研究員を経て、同14年8月京都大学大学院工学研究科助手に採用、同19年4月同助教、同22年7月に同准教授となり、現在に至っている。

今回、受賞の対象となった研究業績は「ナノ空間を利用した精密重合法の開発と特異な物性発現」である。高分子の構造や集積状態を精密に制御できる手法の開発は、われわれの生活を豊かにする新しい高分子材料の創出につながり、高分子化学や材料化学における大きな研究課題の一つとなっている。同准教授は、金属イオンと有機配位子を精巧に組み合



わせることで、ナノサイズの規則的な空間を有する金属錯体型反応容器を独自に構築した。このナノ空間内で種々のモノマーを重合することで、従来法では困難であった立体規則性、反応位置、配向状態などが精密に制御された高分子材料を産み出すことに成功した。また、ナノ空間内に高分子鎖を拘束することで、今まで未開拓であった単分子鎖から数本鎖の高分子集合体が示す物性も明らかにし、導電性の飛躍的な向上やガスセンサーへの応用にも成功している。

本研究における斬新な発想と広い適用範囲は機能性高分子材料を創製する全く新しい方法論として革新をもたらし、産業界にも大きなインパクトを与えていることから、国内外を問わず非常に高く評価され、今後のさらなる発展が期待されている。

(大学院工学研究科)